広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	新約聖書(マタイ伝)に見られる否定表現に就て : ouとmēの用法上の相違 〈特集 否定表現について〉
Author(s)	竹島, 俊之
Citation	広大言語 , 5 : 12 - 18
Issue Date	1965-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046220
Right	
Relation	

§5. む　す　び

少くとも，Der Nibelunge Notに於いては，ne (en) はniht その他の否定詞と対等の立場に立つものではなく，補強のために置かれた否定詞にその席を譲ろうとしている。辛うじてその余命を保つている。換言すれば，niht その他の否定詞は，補足強調の身分から主客を追い出し，自分一人で否定概念を表わし得る地位にまで昇格している。即ち，ne (en) －nihtの原則は，新興のnihtの力が強大になり，その均衡は破られ，新興はその力を益々増大し，旧勢力は没落を益々早めてゆくだろうと推察される。

さて，次回は次の問題について述べたい。

1. ne (en) の脱落とnihtの脱落について，今少し詳しく個々の事例に検討を加えて論じたい。
2. wenic，selten，lutzel，klein usw. を中心にして，Der Nibelunge Not に見られる否定の種々相について述べたい。
3. ne (en) とniht との力関係をmhd の他のテキストでも調らべ，その結果をDer Nibelunge Notの場合と比較検討してみたい。

（ 続 ）

新訳聖書(マタイ伝)に見られる否定表現に就て

－ouとmēの用法上の相違－

竹　島　俊　之

1. ギリシヤ語には否定辞にouとme，及びその合成語oudeis mēdeis oute mēte oupote mēpote等の二種がある。両者の用法上の差は極めて微妙であるが，大体次のような差がある。ou による否定は事実の否定であるのに反して，mē による否定は希望，想像等，何らかの話者の主観的観点の介入したものの否定を示す。後者の用法はその源を原印欧詩に持つ

と考えられている。即ち，mēはskt.mā，Av，OPers.mā，Arm mi，に対応するものであり，最古の用法はSkt.mā と同様にaoristのaugmentを除いた形と共に否定命令を作るにあつた。しかし既に古典期のGk ではこの形は失なわれており，その代りのaorist 接続法による否定命令と共にmē が用いられ，又現在の命令法や命令に用いられた不定形の否定にも用いられるに至つた。いわゆる恐れを表わすmē と共に用いられる接続法も又意志の接続法であるこれから希望を表わす希求形，実現不可能な願いを表わす直接法にも使用された。これらの用法が従属節になつた時も同様である。従つて目的，恐怖，条件を表わす節，ついで目的，条件を伴うあらゆる関係節もmē によつて否定される。不定形に於ては，否定の命令，願望，要求を示す時。分詞では何らか条件的な，普通的な場合にmē が用いられる。cf.hoi ou pisteuontes＜（実際上の特定の）信用しない人々。＞hoi mē pisteuontes＜（一般的に）信用しない人々。＞しかしながら古典期Gk に於ては上の条件以外の不定詞，分詞にはou が用いられ，更に直接法以外でも期待を示す接続法，可能を示す希求法にはou が用いられるため両者の用法上の区別，差は可成り複雑である。ところがNew Testamentのコイネーになると，その用法上の区別は大体に於て一つの規則に統一され，ずつと単純化される。即ち，ou は直接法を否定し，mē は不定詞，分詞を含めた他の法を否定するのに用いられる。これらの規則は又その合成語にも適用される。

次に，今述べて来たようなou，mē二つの否定辞の区別がNew Testamentマタイ伝に於てはどのようになされているかを調べて見ようと思う。（主としてmē の用法を中心として）。

2. ①分詞： 全てmē によつて否定される。ho mē ōn met emou kat' emou estin 12－30＜私の味方でないものは私に反対するものである。＞ē epi tois 99 tois mē peplanēmenois 18－13＜迷わなかつた99匹。＞hōsei probata mē ekhonta poimena 9－36 ＜羊飼を持つていない羊の如く＞一形写詞的用法－。kai mē poiōn autols homlōthoetai andri mōrōi 7－26＜実行しない者は愚かな者に比較される。＞次の例は明きらかに事実を述べていると思われる。planasthe mē eidones tas graphas mēde tēn dunamin tou theou 22－29＜あなた方は聖書も知らず，神の力も知らない。＞－1－19, 6－3, 7－19, 7－26, 13－19, 10－28, 18－25, 22－12, 22－24, 22－25。－

② 不定詞： 意味内容に関わらず，全てmē により不定される。

イ 一般的事実の否定。kai eutheōs eksaneteilen dia to mē ekhei－

n bathos gēs 13−5<深い土を持つていないためにすぐに芽を出した。>13−6 22−23, 8−28。 −

ロ 命令，egō lego humin mē omosai holōs 5−34 < 切誓つてはならない。>5−39。

ハ 禁止。kai krēmatisthentes kat' onar mē anakampsai pros Hrōdēn 2−12<ヘロデ王のところへ引き返すなと夢で御告げを受けた。>− 5−35, 6−1, 23−23。−

③ 条件文：

イ 内容が非現実を表わす場合でも，その動詞の形が直接法であるならば，ou が用いられる。kalon ēn autōi ei ouk egennēthē ho anthrōpos ekenos 26−24 <その人が生まれなかつたら，彼にとつてはその方が良かつたであろう。>ei ou dunatai touto parelthein ean mē auto pio，26−42 <この杯を飲む他に道がないのでしたら。>例外kai ei mē ekoeobō thesan hai hēmerai ekeinai ouk an esōthē pasa sarks 24−22< olo その期間が縮められないならば，あらゆる肉体は存在しないであろう>

ロ 接続法で表わされる条件文のprotasisはmē により否定される。そのapodosisも否定の場合にはou（動詞は直接法），或はou mē（動詞は接続法）が用いられる。ean ekhēte pistin kui mē diakrithēte·ou monon to tēs sukhēs poiēsete 21−21<あなた方が信じて疑わないならば，このいちじくにあつたようなことができるばかりでなく。>ean mē straphete kai qenēsthe hōs ta paidia ou mē eiselthēte eis tēn

18−3<心を入れ変えて幼な子のようにならなければ，天国に入ることは出来ないであろう。>− 5−20. 10−14. 10−13, 11−6, 12−29, 18−16。

④ 命令文・禁止文：

イ 未来の禁止を表わす場合のみou が使われる。ou phoneuseis，oumoikheuseis，oupseudomarturēseis 19−18<殺すな，姦淫するな，盗むな，偽証するな。>ouk ekpeiraseis kurion ton theon sou 4−7<汝の神キリストを試みてはいけない>ouk esesthe hōs hoi hypokritai 6−5− 5−21, 5−27, 5−33, 6−24。 −

ロ その他では全てmēが使われる。

接続法と共に禁止を表わす場合：mē Phobēthēs paralabein Marian tēn gynaika sou 1−20。mē Salpisēis emprosthense6−2＜汝の前でラッパを鳴らすな。＞mē oun homoiothēte autois 6−8。kai mē eisnegkēis hēmās eis peirasmon 6−15＜我等を誘惑に導かないように。＞Mē dōte to hagion tois kysin 7−6＜聖なるものを犬に与えるな。＞ − 10−9, 10−19, 10−20, 10−34, 18−10, 23−8, 23−9, 23−10, 24−23 24−25, 26−5, 3−4, 5−17, 5−42, 6−31。 −

ハ 禁止命令

mē ginesthe hōs hoi hypokritai skythrōpoi 6−16＜偽善者のように陰気な顔をするな。＞Mē thēsaurizete hymin epi tēs gēs 6−19＜地上に富を蓄わえるな。＞mē merimnāte tēi psykhēi hymōn ti phagete 6−25＜何を食べようかと気遣うな。＞Mē krinete, hina mē krithete 7−1。mē Phobeisthe apo tōn apoktennontōn to sōma 10−28＜体を殺す人を恐れるな。＞ − 10−30, 14−28, 17−8, 18−33, 19−6, 19−14, 23−3, 24−6, 24−17, 24−18, 28−5, 28−10。 −

⑤ hina（目的：〜せんがために。願望：〜するように。結果：〜ために）やhopōs（目的：〜ために 依頼：〜ように）に導かれる副文に於て。常にmēが用いられ動詞は全て接続法の形を取る。epetimēsen autois hina mē Phaneron auton poiēsōsin 12−16＜自分の事をあらわさないようにといましめた。＞ hina de mē skandalisōuen autous 7−27＜彼等をつまづかせないように＞ hina mē thorubos genētai en tōi laōi 26−5＜民衆の中に騒動が起らないように。＞ − 24−20, 26−41。 −

hopōs mē Phanēis tois anthrōpois nēsteuōn 6−18＜断食していることを人に示さないように。＞ 更に，hina，hopōs で導かれない副文に於てもmēと接続法の使用により，その意味が表わされる。blepete mē tis hymais planēsei 24−5＜まどわされないように注意せよ。＞ mē holon to sōma sou blēthēi eis geennan 5−29＜全身が地獄の火に投げられないように。＞

⑥ 合成語に於けるouとmēの対応。

イ oute：mēte

en gar tēi anastasei oute gamousin oute gamizontai

6−20。 ēlthen gar 'I annēs mēte esthiwn mēte pion kai logousin。 後者は分詞esthion piōn を修飾。

ロ ouketi : mēketi

ouketi eisin dyo alla sarks mia 19−6。 ou mēketi ek sou karpos gemētai eis ton aiōna 21−19＜今後お前には永久に実がならないように。＞ 前者は単なる事実の陳述であるが，後者には禁止的意味が含まれている。

ハ oudepote : mēpote

eg oudepote skandalisthēsomai 26−33 ＜私は決してつまづかないでしよう。＞ oudepote anegnōte hoti ～ ; 21−16 ＜未だ読んだことがないのか＞ oudepote ephanēhoutōs en tōi Israēl 9−33 Kai tote homologēsō autois hoti oudepote egnōn hymās 7−23。

mēpote se paradōi ho antidikos tōi kritēi 5−25 ＜訴えた人が裁き人に汝を引き渡さないように＞

mēpote katapatēsousin autous en tois posin autōn 7−6 ＜足で踏みつけないように。＞ −13−15, 4−6, 13−29, 15−33, 27−64。

ニ oudeis : mēdeis

Oudeis dunatai dysi kyriois douleuein 6−24 kai ouden adynatēsei hymin 17−20 etc. hina mēdeni eipōsin 16−20 hora mēdeni eipēis 8−4 mēdeni eipēte to horama heōs ～ 17−9。 mēden soi kai tōi dikaiōi ekeinōi 27−19

このように合成語に於ても，ou mēの用法上の差異がはつきりと現われている。 即ち，ou は直接法を支配し，mē は不定詞，分詞を含めた他の法Modiを否定するという規則はあらゆる場合に適用されると考えて良いと思われる。

⑦ ou mē : 直接法未来，接続法に於てのみ使われる。これは④で述べた禁止・命令文に於ける動詞の形と対応する。

直接法未来：ou mē temēsei ton patera autou ē tēn mētera autou 15−6。 Kan deēi me syn soi apothanein, ou mē se aparnēsomai 26−35。 ou mē estai soi touto 16−23＜決してあなたにはそういうことは起らないでしよう。＞

接続法：hoitines ou mē geusōntai 16−28 hoi de logoi mou ou mē parelthōsin 24−35。amēn legōhymin, ou mē aphethēi hōide lithos epi lithon 24−2

ou mē eiselthēte tēn basileōn 5−20 <決して入ることはできない>− 5−18, 5−26, 10−23, 10−42, 13−14, 18−3, 23−39, −

例外 ： legō de hymin, ou mē piō ap' arti 26−29 − 形は現在形であるが，その内容はap' arti から判断できるように未来へと志向しているためにou mē が使用されたのであろう。

3. 疑問文に於けるou, me の用法上の差異。

疑問文に於ては両者は，更にはつきりと区別して用いられる。即ち，ou は肯定の答えが期待されている場合，mē は答が否定的な場合に使われる。

① ou ： houtōs ouk iskhysate mian hōran grēgorēsai met' emou; 26−40. ouk anegnōte en toi nomoi hoti ～; 12−5。ouk eksestin moi ho thelō poiēsai en tois emais; 20−15 <私のものは好きなようにして良いではないか> ou blepete tauta panta ; 24−2 oukh hymeis mallon diaphoerete autōn ; 6−26 <あなた方は彼等よりすぐれているではないか> ouk houtos estin ho ton tektonos hyios ; 13−55 <この人は大工の子ではないのか> − 17−24, 24−2, 13−55 −

② oukhi ： 反語的に肯定の答を期待する場合。 oukhi hē pleion estin tēs prophēs～; 6−25<魂は食物より優つているのではないのか> oukhi kai ethnikoi to auto poiousin ; 5−47.

oukhi kratēsei auto kai egerei ; 12−11<手をかけて引き上げてやらなかつたろうか> − 5−46, 10−29, 13− 27, 13−56, 18−12, 20−14.

③ mē 否定の登が期待される場合。

mē lithon epidōsei autōi ; 7−10<(その子がパンを求めるのに)，石を与えるだろうか> mē heōs ouranou hypsōthēi ; 11−23<空迄も上げられようと思つているのか> mē ophin epidōsei autōi ; 7−11 mē dynantai hoi hyioi tou nymphōnos penthein eph' hoson met' autōn estin ho nymphios ; 9−15

④ mēti ： 否定の答を期待する場合

mēti houtos estin ho hyios David ; 12−23

mēti egō eimi, kyrie ; 26−22〈 先生私ではないでしようね。ユダーいや，お前だ。キリスト〉

4. 以上見て来た如くouとmē はいかなる場合でも，最初に述べた規則，即ち，「ou は直接法にmē は不定詞，分詞を含めた他の法に用いられる」という規則に沿つて，はつきりと区別されて用いられている。更に古典語に見られる如く同種の否定辞（例えばou, oudeis, oudepote etc.）を連ねる方法も余り用いられなくなつたため，New Testamentの文章構文は否定表現に関しては非常に明快となつている。

— 完 —